

幸

KOHDA

田

真

MAIN

立音

『天祐なり』
高橋是清・百年前の日本国債

（上・下）

刊行記念
インタビュー



大

正から昭和にかけて、実に七度に亘って大蔵大臣を務め、この国の財政の危機を何度も救った高橋是清（たかはし けいせい）。いまでも財政を語るうえでしばしば引き合いに出されるこの大物政治家は、いったいどんな人物だったのか。「日本国債」

などのベストセラーで知られる幸田真音さんが現代の視点から、その波瀾万丈の人生と、財政手腕を活写する。「いまこそ高橋是清のような政治家を」と幸田さん自身も語る、その魅力とは。

取材・文＝タカザワケンジ
撮影＝ホンゴユウジ



あらすじ

仙台藩の足輕の家に生まれた高橋是清。模範で英語を学び渡米するも、アメリカでは奴隷として売られる体験をして帰国。その後は堪能な英語力と持ち前の明るさを武器に、教師、官吏、相場師、銀行等々、失敗を重ねながらも、官民で様々な職を転々とする。やがて日露戦争の戦費調達という使命を帯び人脈を駆使して日本国債の売り出しに成功。日露戦争を勝利へと導く。日銀総裁、蔵相には七度就任、首相も歴任し、昭和恐慌の鎮静化にも奔走した無私の人・高橋是清が二・二六事件の凶弾に倒れるまでの、波瀾万丈の生涯を描いた歴史経済小説！
定価／各一六八〇円

「百年前の『日本国債』」

——大蔵大臣を何度も務め「財政の神様」と呼ばれた政治家——高橋是清についてはそれくらいの知識がなかったのですが、この『天祐なり』を読んで、こんなにすごい人だったのかとあらためて驚きました。幸田 高橋是清が何をした人なのか、その具体的なところは意外と知られていないかもしれませんね。この小説を新聞で連載していた時の反響も、是清の業績を初めて知った、という読者が多かったようです。

——いま、なぜ、高橋是清なのか？ という疑問をまず念頭に置いて読んだのですが、現在と重なることがあまりに多かったんです。幸田 たしかに、日銀による巨額の国債の買入れや、リフレ派、異次元の金融緩和策など、いま盛んに話題になっていますが、是清の時代と経済環境があまりに似ていることに驚かされるんです。東日本大震災の後と、関東大震災の後、という点もそうですね。戦争こそな

いけれど、大量の累積債務を抱えた日本が、今後どうやって安定的に資金を調達していくかは、まさに現在この国が直面している問題でもあります。いまも日本国債を海外で売ろうとしています。百年前にそれをしたのが高橋是清で、日露戦争の戦費調達のためでした。当時といまとの共通点は本当に多いですね。——高橋是清を書いてみようと思われたきっかけは？

幸田 以前、財政制度等審議会という財務大臣の諮問機関で、七年間ほど委員をしていたことがあるんです。当時は国債の約九五％が国内で買われていましたが、日本の経済環境の悪化もあって、これからは海外投資家にも眼を向けたいと、国債を海外に売るべく、海外向けのIR活動を始めた。そのとき、財務省の人たちが「こんなふうには日本国債を海外に売ろうとするのは、高橋是清以来です」とおっしゃったんです。その言葉がとても印象的でしてね。私は二〇〇〇年に『日本国債』という小説を書い

ているのですが、それ以前から、日本の国債市場、とくに日本の財政問題は私のライフワークだと思って関心を持ってきました。その視点からも、是清のやってきたことは、『百年前の『日本国債』』じゃないかと思っただけです。

——なるほど。実はこれまで高橋是清のことを正面から書いた小説はあまりありません。司馬遼太郎の『坂の上の雲』のように、登場人物の一人としてはしばしば描かれています。高橋是清を主人公にした著名な小説は思い浮かばない。そう考えたとき、おそらく幸田さんのように、財政の面からキチッと書ける小説家が、いままでいなかったからではないかと思いました。

幸田 それはうれしいですね。私自身、債権ディーラーとして働いた経験がありますので、英国ポンドが基軸通貨だった当時の国際金融市場の仕組みはどうだったのかとか、ロンドンで日本が外債を発行できたということは、当時の欧米にはそういう態度を持った投資家がいたんだろうとか、



次々と興味が湧いてきて、調べ始めたんです。資料は本当にたくさんありました。

——是清は国際感覚を身につけた政治家という点でも異色ですね。

幸田 十三歳のときにアメリカに渡って英語を身につけるんですが、それもただしゃべれるのではなく、巧みな交渉術の道具として使いこなすことができた。最近では少し変わってきたかもしれませんが、長い間、日本の政治家は日本国内だけで完結していることが多かったように思います。でも昔は、是清のように、海外に出て行って人脈も築き、ときには要人と対峙して、それなりにこちらの主張を通すことができる政治家がいた。それがとても新鮮でした。新聞連載をしていたときも、こういう人こそ、いまの日本の政界にいてほしい、という読者からの声がすごく多かったですよ。

——是清はアメリカから帰ってきて、十代ですでに英語教師になっているんですね。幸田 とはいえ、当人は英語学校に通って文法から習う、というような学び方をして

いない。それどころか、そもそも正式な教育とは無縁でした。足軽の子、それももら

われてきた子だから、エリートじゃないんですね。その代わり、自分で現場に出て、

実体験を踏まえて問題を解決する力や方法を、自ら体得した。自主自立、自助の人なんです。だからこそ、何か問題があるたびに引っ張り出される。問題解決能力を期待されるんです。現場を知らない人が知識だけで考える対策とは違って、自分でやってみて、失敗してきた実戦経験を踏まえている。だから、多角的で緻密で成功率が高い。

考えてみれば、是清の人生は失敗の連続なんです。転職も、何度したことか。しかも、まるで違う仕事に就く（笑）。特許庁をゼロから立ち上げ初代局長になって、これで安泰と思ったら、突然南米に行かされ、国のために銀山開発に携わる。ところが詐欺に遭って失敗。その責任を取られ、私財をなげうち部下たちを助ける。いつも国のため、人のため。自分のことは後回しです。こういう人物こそ、国を引っ張るのに

高橋是清 年譜



幸田真音 『天佑なり』

それとも、いつの時代もそれが国家、財政の正論だということなのかもしれません。

驚くのは、いまから百年以上前の

是清が残した言葉、 提言の現代的性

——幸田さんの作品のなかでも、歴史上の人物の足跡を追うのは初めての試みですね。

幸田 現存する資料には、原典にまでたどり着いて調べました。ただ何に一番苦労したかというと、何を書かないか、ということ。面白いエピソードがあまりにも多すぎて（笑）、断腸の思いで省いたエピソードが山ほどです。是清の随想録や語録、聞き書きの自叙伝が残っていて、そのなかにいい言葉がたくさんある。それを少しでも多く紹介したい。公的に残している提言もたくさんあって、それを読むと「これはいまやるべき！」と思うことが多いんです。それほど日本が昔もいま変わらないのか、

ふさわしい真のリーダーだと思います。

日本人が、ここまできつちりと、経済論、金融論、世界のマーケットを語れたということ。それだけの知識、情報力、理解力があつたのはすごいことだと思います。

——是清は経済学や財政学を専門に学んだわけではないのに、なぜそれが可能だったのでしょうか。

幸田 勉強していなかったのではなく、学校で習わなかったという言い方が正確です。独学で必死で学んだのです。たとえば欧米の新聞で話題の良書だと知ると、取り寄せて原書ですぐに読むわけです。それに、職場の後輩や教え子たちが海外赴任から帰国すると、必ず、向こうでどんなことがあつたかを報告に来ていたそうです。

——情報収集力を持っていたということですね。実に現代的です。

幸田 いままで是清を中心に据えたフィクションがあまり出ていなかったことが不思議なくらいです。ただ、やっぱり財政問題や金融政策は、一般読者にとつきにくいという先入観があつたからかもしれません。



幸田真音 こうだ・まいん
1951年生まれ。米国系銀行や証券会社で、債券ディーラーなどを経て、95年『小説ヘッジファンド』で作家に。2000年に発表した『日本国債』は日本の財政問題に警鐘を鳴らした作品としてベストセラーになり、多くの海外メディアからも注目を浴びる。財務省・財政制度等審議会委員等の公職も歴任する。

そう考えると、経済小説を書いてきた私が是清と出会ったことにも、それなりの意味があったのかと思います。是清が生涯を通じてしてきたのはどういうことだったのか、その解説は意外でないでしょうか？

—— 学術的な解説で止まってしまうって感じですね。

幸田 私はマーケット出身の人間なので、その部分を解説することで、一般の読者の方にもその面白さをもっとわかってほしいという思いがあります。物語のなかでは是清が語っている言葉の多くは、実際の語録や随想から採っているのですが、私は書きながら、是清が、いまの日本人に、私の筆を借りて「言ってやってくれよ」とおっしゃっているような思いを何度も感じました。

—— 是清は国債を売っただけではなく、産業振興に熱心で、特許、知財にも深い関心をもっていた。現代に通じる問題に取り組んでいたことも、意外でした。

幸田 まさに先取りですね。次に何が起きるか、何が必要かを是清はいつも考えて

いる。とても共感できました。私にもそういうところがあるので（笑）。そして、それはなぜだろうと考えたんですが、きっと、是清もマーケットの現場にいたからなんだろうと思うんですね。是清は自らもマーケットに参加することで、銀と紙幣との価格乖離とか、先物と現物の差といった裁定取引の世界を知っていた。先物取引もし、ついに株屋まで開業しているんですよ。それも相場が面白いからではなく、仕組みを真に理解したかったからです。

是清は現場を経験し、リアルの世界を自ら知ろうとする人でした。その世界のメカニズム、そこにいる人の心理を知りたがった。マーケットってそういうものだし、ビジネスってそういうことでしょう。いかに



—— 高橋是清には「ダルマさん」というあだ名があって、写真を見ても、その風貌からして円満な雰囲気ですね。

幸田 いい顔をしていらつしやるでしょう？ 執筆中、是清の写真を仕事部屋にベ

タベタと貼っていたんですよ。大きな年表をドア一面に貼って、ご家族や、関わった人たちの写真や資料を付け足していきました。横の壁には、それぞれの時代の是清の写真のコピーして貼っておいたので、夜中に書いていて、ふと横を見ると、じっと見守っていてくださるの。是清の顔は、逆境にあっても、自らを恃んで自分を信じてや

—— いま、リーダーに求められることを是清から学ばしただけでいいのでしょうか。

—— 是清の人生はジェットコースターのようですね。大成功の次は大失敗。そして次は成功。そうしてかたちづくられた人格については、どうお感じですか。

「オブティミスティックなリーダー」

幸田 オブティミスティックなことだと思

います。トップに立つ人は最後は楽天的じゃないと、誰もついてきませんよね。是清はロンドンで国債発行をするとき、現地で記者会見を開きます。そんな前例はなかったし、ロンドンで日本国債が売れる可能性はほぼゼロ。にもかかわらず、強気の会見をします。それはマーケットを知っているからです。弱気を見せたら売れるものも売れなくなることを知っていたんですね。

—— 天からの恩恵に感謝する「天佑なり」。それはあの時代に是清という人物を得た日本にとってもそうだったと感じました。

幸田 「天佑なり」、ロンドンでの国債売り出しに成功して思わず漏らした言葉ですが、自分でそう言えるところがすごいんですよね。人生山あり谷あり、国のために一所懸命やっても国内メディアは無理解で総スカン。苦勞に苦勞を重ねたうえの成功でしたが、それでもなお、自分の手柄とするのではなく「天佑なり」と言える。それが高橋是清という人の魅力なのです。

—— 是清は、自分の得を優先しないんです。いつでも国のため、人のため。なかなかできないですよ。いまは国民も政治家も自分を守ることで必死ですよ。でもこんな時代だからこそ、自分を優先しないというところがいかにすごいことか、考えてほしい。是清はそういう人物だったからこそ、国際的にも信頼もされたんだと思います。